

# 王さまの感心された話

小川未明

青空文庫



この世界せかいが造つくられましたときに、三人にんの美うつくしい天使てんしがいました。いちばん上うへの姉ねえさんは、やさしい、さびしい口くちか数の少すくない方かたで、そのつぎの妹いもうとは、まことに麗うるわしい、目めの大おおきいぱちりとした方かたで、末すえの弟おとうとは快活かいかつな正しょう直じきな少しょう年ねんでありました。

みんなは、それぞれこの世界せかいが造つくられるはじめてのことでありますので、なにかに姿すがたを変かえなければなりませんでした。

「よく考かんえて、自じ分ぶんのなりたいと思おもうものになるがいい。けれど、一度姿すがたを変かえてしまったなら、永えい久きゅうに、ふたたびもこのようてんしな天使てんしにはなれないのだから、よく考かんえてなるがいい。」と、神かみさまは申もうされました。

三人の姉と妹と弟は、それぞれ、なにになつたらいいだろうと考かんえまがした。姿すがたを変かえてしまえば、もういままでのように、三人にんは仲なかよくいつしよにいて話はなしをすることもできなければ、また、顔かおを見るみこともできないと思おもいます。三人にんは、それが悲かなしくてなりませませんでした。

氣きの弱よわい妹いもうとは、目めにいつぱい涙なみだをためてうつむいていました。すると、氣け高たかい、さびしい姉あねは、やさしく妹いもうとをなぐさめて、「たとえ、遠とほく離はなれることがあつても、わたしたちは、毎まい晩ばん顔かおを見合みあうことができれば、それで満まん足ぞくするであらう。」といいました。

いよいよ三人にんの決けつ心しんはつきました。そうして、神かみさまから、

おまえたちは、なにになるかと問われましたときに、

いちばん上のうえ気高い姿すがたの姉あねは、

「私は、星ほしになります。」と申しました。

つぎの妹いもうとは、

「私は、花はなになります。」と申しました。

そうして、末すえの弟おとうとは、

「私は、小鳥こどりになります。」と申しあげました。

神かみさまは、いちいちそれを聞いて、お許ゆるしになりました。こう

して、三人にんは、ついに、星ほしと花はなと小鳥こどりになつてしまつたのです。

星ほしは夜よごとに空そらに輝かがやきましたけれど、幾いく百万まんり里りとなく遠とおく地ちの

上うへから隔へだたつてしまつて、もはや言葉ことばを交かわすこともできなくな

りました。それでも花は、夜ごとに空を向いて、星から降ってくる露を身に受けました。小鳥となつてしまった弟は、昼間は、すぐの姉の花のそばへいつて遊び、さえずつていましたけれど、いちばん上の姉の姿を見ることができませんでした。それがすから、星が暁とともに隠れてしまう前に大急ぎで起きて、空に輝いている、さびしい姉の姿を見上げることになりました。

なんで、この三人の天使は、いままでのように、いつしよにいて楽しく暮らすように考えなかつたでしょう？

それから、幾世紀はたちました。やがてこの地上をつかさどられた王さまがあります。

王さまは、いたつて勤勉な方でありましたから、太陽が出

ると働き、そうして、日の暮れるまで働いて、暗くなつたときに  
 休むような勤勉なものが、なんでも好きでありました。たとえ  
 ば、ありをごろんになると、

「ああ、ありは感心なものだ。」と思われしました。

また、みつばちをごろんになると、

「ああ、みつばちは感心なものだ。」と思われしました。

けれど、王さまは、美しく咲いた花をごろんになったとき、花  
 というものは、いかにも怠け者だと思われしました。また、星を  
 らんなされたとき、星は、ああして輝いて、なんの役にたつのだ  
 ろうと思われしました。また、小鳥がやかましくさえざるのをお聞  
 きなされたとき、小鳥というものは、じつにうるさいものだと思

われました。

そのとき、不思議な魔法使いが王さまのもとへ伺いました。この魔法使いは、遠い昔のことでも、またこれから幾千年の後に起こることでも、魔法によって知ることができたのです。

王さまは、さつそく、魔法使いに向かつて、

「あの星は、いったいなにもものだ。そうして、毎晩なんのために、あんな高いところで光っているのだ。」と聞かれました。

太古のことで、星や、花や、鳥や、すべてのものに対して、人々には不思議を感じていた時代であります。だから、この王さまのお問いになったのも無理はないことでした。魔法使いは広い庭に火をたきました。そうして、空に輝く星に向かつて、祈りを

ささげました。やがて、こうして黙だまつていますうちに、魔法使まほうつかいは、なんでも遠とおい遠とおい、星ほしと話はなしをすることができるようになつたのであります。

けれど、魔法使まほうつかいと星ほしの話はなしは、もとより王おうさまの耳みみには聞きこえませんでした。

「星ほしは、どうしてできたのじや。」と、王おうさまはいわれました。  
 「幾いく千ねん年ぜん前に、三人にんの姉あねと妹いもうとと弟おとうとのいい天使てんしがありました。  
 この世界せかいが作つくられた時じぶん分に、三人にんは、思おもい思おもいの姿すがたに變かわるよううえに神かみさまから命めいぜられたのであります。そうして、いちばん上うえのさびしい、口くちかずの少すくない姉あねが星ほしとなつたのであります。」と、魔法使まほうつかいは、お答こたえを申もうしあげました。

王さまは、これをお聞きになつて、うなずかれました。

「しかし、ああして、毎晩、空で輝くのはなんのためじや。太陽のように暖かな光を送るのもなく、また月のように夜路を照らすというほどでもない。なんのために夜もすがら光るのじや。」と、王さまは問われました。

すると、魔法使いは、そのことを星に問いました。

星は、魔法使いを通して、なんで自分は星になつたかということ、王さまに答えたのであります。

「王さま、この世の中には、みんな幸福なものばかりであります。中には貧乏のものもたくさんいるのであります。そして貧乏の家に生まれた子供は、夜は寒くて目をさまします。あ

るときはまた、仕事に出た父母が、とつくに日が暮れたけれど帰つてきません。そんなときは、さびしがって泣きます。私は、その子供の無事を祈らなければなりません。また、あるときは両親を亡くした不幸な子供があります。中には父親だけで、母親のない子供もあります。それらの子供は、夜になると目をさまして泣きます。私は、破れ家のすきまから、それらの子供をいたわってやらなければなりません。それで、私は、空の星となつたのです。」と申しあげました。

この話をお聞きになると、王さまは、ほんとうに、そのやさしい心がけに感心なされました。それから星を尊まれました。

また、つぎの妹が花になり、弟が小鳥になつたことを王さまに

知らせますと、それをも魔法使いを通して、聞きたいと思われ  
ました。

魔法使いは、美しい花の前にいつて、おなじように祈りをさ  
さげました。花は、魔法使いを通して、王さまにお答え申しあ  
げました。

「私は、姉が星となりましたときに花となりました。それは、美  
しい着物をきて、怠けているではありません。人間はこの世  
に達者でいますうちは、たがいになぐさめもしますし、またた  
ずねてもゆきませんが、ひとたび死んで墓にゆきますと、めつたに  
たずねるものもありません。私は、その哀れな死んだ人たちをな  
ぐさめますために花となりました。そうして、昼でも、まただれ

もない夜よるでも、墓はかの前まえで霊魂れいこんをなぐさめるために香かつています。」と申しあげました。

王おうさまはこの言葉ことばをお聞ききになると、まことにその心こころがけを感じかんしん心こころなされました。そうして、永えい久きゆうに花はなを愛あいされたのであります。

最後さいごに、王おうさまは、魔法使まほうつかいに命めいぜられて、

「あの口くちやかましい、小鳥ことりはなんのために？」と、そのことを小鳥ことりに聞きかせられたのであります。魔法使まほうつかいは、自分じぶんの持もつているつえの上うえに小鳥ことりを止とまらせました。そうして、おなじように祈いのりをささげると、小鳥ことりは語かたりました。

「私わたしは、二人ふたりの姉あねが星ほしと花はなになつたとき、小鳥ことりとなりました。そ

れは、野山を飛びまわって遊ぶためではありません。毎日、山  
まかわ河を越えてゆく旅人が幾人あるかしれません。それらの旅  
びびと人は、ゆく先を急いでいます。けれど疲れて、よく眠入ってい  
 るものもあります。家には、子供が父親の帰るのを待っている  
なかのもあります。中には、重い病気にかかつて、早く息子の帰る  
まのを待っている年取った親たちもあります。それらの旅人に元  
んき気づけるために、快く朝早く目をさませるために、私は鳴く  
もうのです。「と申しあげました。

おう王さまは、弟が小鳥になつた心がけがよくわかりました。そし  
あねて、姉も、妹も、弟も、みんな人々々のために思っているのをお  
ふか知りになつて、深く感心なされました。王さまは、永久に

ことり  
小鳥を平和の使いとされたのであります。

それから、すでに幾万年かたちましたけれど、星と花と小鳥  
は、人々から愛せられ、詩人から歌われています。三人の姉と  
妹と弟は、暁のある一時を、ものこそいわないが顔を合わして、  
永久にいきいきとして、たがいになぐさめ合うのでありまし  
た。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「まなびの友」

1920（大正9）年12月

※表題は底本では、「王《おう》さまの感心《かんしん》された話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「王様の感心された話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 王さまの感心された話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>